

彼女は身ごもって男の子を産み、ユダはエルと名付けた。彼女はまた身ごもって男の子を産み、その子をオナンと名付けた。彼女はさらに男の子を産み、その子をシェラと名付けた。彼女がシェラを産んだとき、ユダはケジブにいた。ユダは長男エルにタマルという名の妻を迎えた。(創世記 38 章 3 節～6 節)

創世記 38 章は、「ヨセフ物語」が突然打ち切られ、文脈から外れているユダとタマルの話に切り替わっている。なぜであろうか。ユダはヤコブの四男で、ヨセフの兄である。ユダはタマルによってペレツとゼラを得、ペレツから 9 代目がダビデである。そして、ダビデの子孫がユダ王国を継承している。一方、ヨセフはアセナトによってマナセとエフライムを得て、12 部族のひとつ、マナセ族とエフライム族へと継いでいく。やがて、ユダ王国は分裂した。イスラエル王国の中心部族となったのは、エフライム族とマナセ族である。「ヨセフ物語」の著者は、イスラエル王国の祖ヨセフ物語の途中に、ユダ王国の祖ユダに関して、独立して伝承されていた物語を、二人を並べる形で挿入したのではないかと。そして、キリストまでの系図を繋いだユダの過ちと悔い改めが 38 章のテーマである。

ユダは兄弟たちから離れて、ヒラという名のアドラム人の近くに住んだ。そこで、彼はカナン人シュアと言う人の娘を見初めてめとり、彼女のところにいった。彼は異教のカナン人の娘と結婚した訳である。彼女は身ごもり男の子を産み、ユダはエルと名付けた。彼女はまた身ごもり、男の子を産み、その子をオナンと名付けた。彼女は更に男の子を産み、その子をシェラと名付けた。ユダはエル、オナン、シェラの三人の男の子を得たのである。

ユダは長男エルにタマルという名の妻を迎えた。ところが、エルは「主の目に悪」とされたので、主は彼を殺された。どんな悪かは分からない。ユダは次男オナンに、「兄嫁のところに入り、兄弟としての義務を果たし、兄に子孫を残しなさい」と言った。これは「レビレート婚」と言われるものである。申命記 25 章 5 節～6 節に、「兄弟が共に住んでいて、そのうちの一人が死に、子がなかった場合、死んだ者の妻は家を出て、他の者の妻になってはならない。その夫の兄弟が彼女のところに入り、彼女をめとって妻とし、兄弟としての義務を果たさなければならない。彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名をイスラエルから絶やしてならない」と規定されている。夫を亡くした妻は家を出て、他の男と結婚できない。また、仕事に就いて自活することなどはあり得ない。レビレート婚は寡婦を守る規定であり、家系を継続させるための重要な決め事であった。ところが、オナンはタマルと交わることを拒んだ。生まれる子どもは自分の子でなく、兄エルの子となり、財産は彼に相続される。オナンは兄嫁のところに入る度に子種を地に流した。これは、主の目に悪とされ、彼もまた殺された。オナンからオナニー(自慰)という言葉ができて、自慰行為を否定する説もあるが、それは、明らかに間違いである。エルとオナンの死は神がなさったように書かれているが、当時の価値観に反したので死に至ったと受け止めたい。

ユダは、三男シェラがタマルを妻にしなければならないことを十分、承知している。嫁のタマルに、「息子のシェラが成人するまで、あなたは父の家で、やもめとして暮らさなさい」と言った。内心では長男エル、次男オナンが死んでしまったので、三男シェラも同じように死んではいけないと思ったから、体よく、タマルを実家に帰したのである。彼女は生きる場を失った。ここから、生きる場を求めて、苦肉の逆襲を展開する。